滋賀文化財だより
NO. 262
2000. 2. 10
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

289. 御倉遺跡の調査から
—ちょっと変わった器台—

1．はじめに

御倉遺跡は、草津市御倉町・橋岡町・矢橋町にまたがった縄文時代から中世に至る集落跡・墓跡として周知されている。この地は、南東に位置する金勝山地から北西方向に流れる草津川・北川・狼川・伯母川など、多くの河川の堆積によって形成された扇状地の扇端部分にあたる。また、N33°Eを示す栗太郡の統一条里に規制された地割が、当遺跡の近辺で乱れを生じはじめる。この地以西は、湖岸まで河川の氾濫が激しく、条里地割が残らなかったものと思われる。

これまでの発掘調査では、主な遺構としては古墳(方墳) 4基・方形周溝墓24基・竪穴住居2棟・掘立柱建物10棟などが確認されている。また遺物では、昭和62年度に行われた草津市教育委員会の発掘調査によって子持ち勾玉が1点出土している。

2．平成10年度の発掘調査状況

平成10年度の発掘調査では、主な遺構として、方墳2基・方形周溝墓1基・掘立柱建物3棟などが発見されている。

a．方墳

1号墳は1辺25～30mで、高さ約1mのマウンド(墳丘)が残されていた。このマウンドは、2段築成以上であったと考えられる。周濠の幅は約3m、深さは約1mあり、マウンド部分の西側から南側の半分にかけて直径20～40cmのピットが1列に周豪に沿って並んでいた。これは、今のところ用途が不明であるが、埴輪を埋めた痕跡ではないかと考えられる。遺物は、周濠から4世紀末～5世紀前半頃の蓋（きぬがさ）型埴輪や5世紀後半頃の須恵器・土師器などが出土している。

2号墳は1辺15～20m、高さ約30～50cmのマウンドが残されていた。周濠の幅は約2m、深さは約20～30cmを測る。遺物は、西の周濠から5世紀後半～末頃の須恵器の杯身や甕、東の周濠からは西の周濠と同じ時期だと考えられる須恵器の器台が出土している。この器台は日本ではあまり出土例がないもので、朝鮮半島との関係が想定されるものである。

b．方形周溝墓

1辺が約8m、周溝部分の幅は約50cm、深さは10～30cmあった。遺物は、南の周溝から5世紀後半頃の須恵器の甕が出土している。

c．掘立柱建物

ＳＢ1は3間（7.1～7.3m）×3間（6.2～6.4m）の南北に長い建物で、方位はN27°30′～29°E示す。柱穴は直径14～48cmの円形で深さは4～40cmを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＢ2は4間（8.8～9.2m）×4間（8.4～9.6m）の東西に長い建物で、方位はN68°Wを示す。柱穴は直径26～44cmの円形で深さは14～42cmを測る。遺物は柱の掘形から12世紀後半～13世紀前半頃と見られる黒色土器の椀が出土している。

ＳＢ3は5間（10.7～10.8m）×2間（4.7m）の東西に長い建物で、方位はN72°W示す。この建物は、南側の2間分に1間（2.4～2.8m）の張り出しがつくと考えられる。柱穴は直径18～56cmの円形で深さは13～44cmを測る。遺物は出土しなかった。

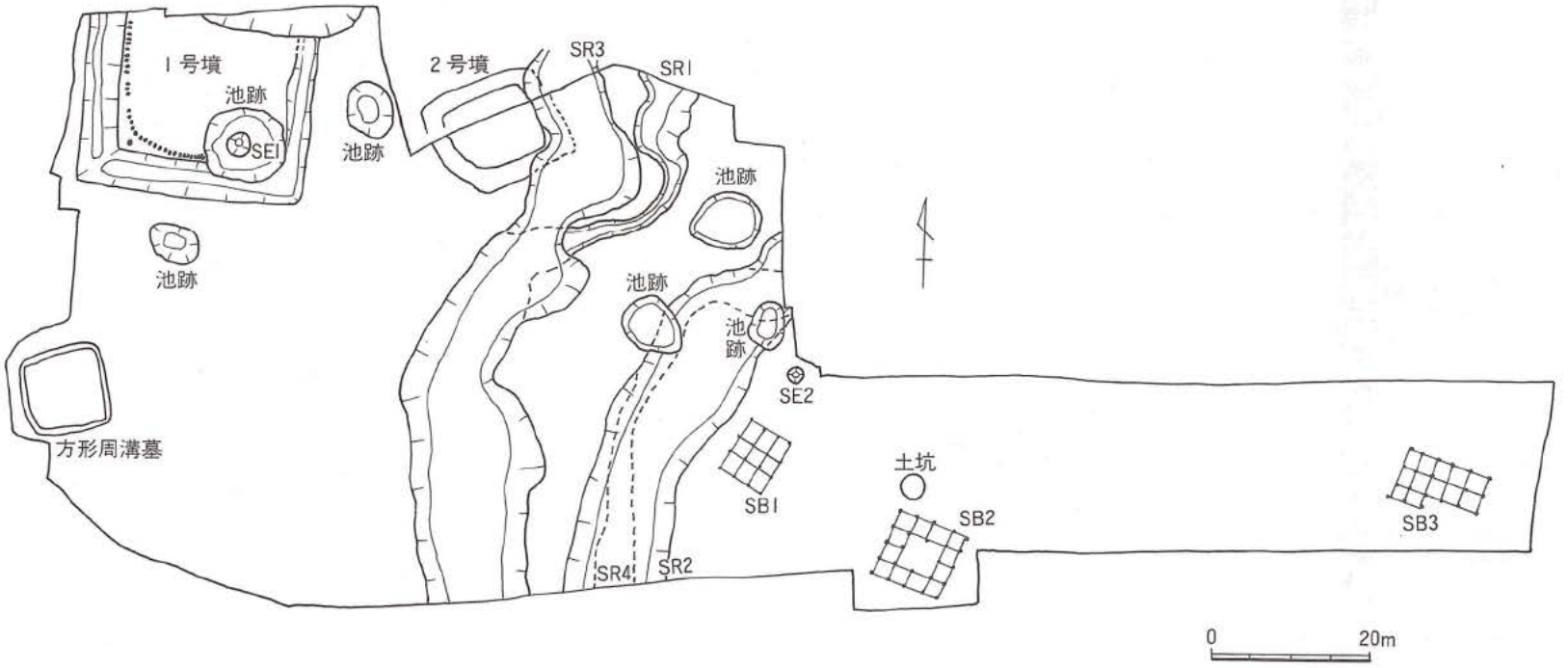
d．その他

主な遺構については以上の通りであるが、その他に池跡から1辺77cm×65cm、高さ31cmの木の箱が出土している。この木箱は、地表から約2m下がった池の底から発見され、箱の底が無く上面隅に直径6cmの穴があけられている。箱の下には表皮付きの丸太が2本敷かれてあった。この木箱の性格については現在のところ不明である。

また、ＳＢ2の北にある土坑からは、12世紀後半～13世紀前半頃と考えられる黒色土器の椀や土師器の皿などが出土している。この土坑は、直径約3mの円形を呈し、深さは約1.5mを測る。土坑は擂鉢状の断面形を呈し、底は粘土層であるため井戸ではないと考えられる。

3．発掘調査のまとめ

2基の方墳は、いずれも5世紀の後半～末頃に考えられ、若干の時期差があることから、1号墳→2号墳への変遷が想定できる。また、中央の川跡ＳＲ1・ＳＲ3は、川の流れていた時期は不明であるが2号墳を避けるように北から南へ流れ、北川の氾濫が2号墳にあたって流路を変えたと考えられるならば、この川の


1号墳
池跡
SE1
池跡
2号墳
SR3
SR1
池跡
池跡
池跡
池跡
SE2
方形周溝墓
SB1
土坑
SB2
SB3
SR4
SR2
0
20m

御倉遺跡遺跡実測図

流れていた時期（北川の氾濫した時期）が２号墳の造られた５世紀末以降ということができる。

木の箱が出土した池跡や後に井戸が造られた池跡など、池状の遺構が６基確認されているが、これらはいずれも近世の後半から近代にかけての陶磁器や牛の骨などが出土している。ＳＥ１やＳＥ２は木製の桶（直径１～1.5m程度）を逆さに積み上げて井戸枠に転用したものであるが、ＳＥ１は池状の遺構の中に井戸枠を２段以上に構築してあった。天井川の横の土地では、池を掘って川からの浸透水を溜めることもあるそうなので、これもそうしたものの一つであろう[1]。

４．２号墳から出土した器台について

平成10年度に調査された方墳（２号墳）から須恵器の器台が出土している。この古墳は、昭和61年度に行われた発掘調査で北半分が検出されていたものである。器台は、東周濠の北端（平成10年度調査と昭和61年度調査の境目）から出土し、周濠の内側（マウンド側）へもたれかかったような状態で発見された。

出土した器台は、いわゆる筒型器台と呼ばれるものに類似している。水平に伸びた後「ハ」の字状に開く台形の脚台部から円筒形の筒状部が伸び、受け部に至ってラッパ状に開くもので、高さ39.5cm、脚部底径17.9cm、筒状部径6.8cm、受け部径15.8cmを測る。

脚部は、中央に上下を削りこんで突帯状に見せる相対的突帯が１条巡る。突帯の上部には長方形の透しが３方に見られるが、下部は残存率が悪く透かし等の確認はできなかった。脚部と筒状部の境は、突帯状の段が１条巡る。

筒状部にはランダムに11個の円形透しが施されている。相対的突帯は２条で、３つの文様帯を形成している。文様帯は上から３条１組の櫛描直線文３条と９条１組の櫛描き波状文２条、11条（４：３：４か？）の櫛描直線文が施され、一番下は無文であった。筒状部と受け部の境には、相対的突帯を作り出した沈線（深い削り込み）が１条巡る。

受け部には１条の相対的突帯が施される。その上下には、上には８条１組、下には９条１組の櫛描き波状文が見られる。

一般的な筒型器台との差異は、筒状部から受け部に至るところでラッパ状に外反することで、一般的な筒型器台が受け部と筒状部との境で一度すぼんで大きく外へ開いたり、明確な角度を持って外へ開く、いわゆる受け皿状を呈しているのと対称を成している。ただ、受け部と筒状部との境は１条の沈線で意識させているようである。また、筒状部に穿たれた円孔もあまり例の無いものであろう。

脚部においては、台形の肩にあたる部分には突帯状のもの以外は飾りがなく、人物や動物のミニチュアを並べる一般的な筒型器台と形態を異にしている。

器台の色調は淡灰褐色を呈し、須恵器としては焼成の悪いものである。

この器台は、その特異な形態から恐らく滋賀県内では出土例が見られないものと考えられ、全国の類例を探してみたところ、群馬県前橋市の前二子古墳[2]や和歌山県和歌山市の楠見遺跡[3]からやや類似した形態の器台の出土が確認できる程度であった。しかし、前二子古墳例は受け部が筒状部から明確な角度を持って伸びていることや、筒状部に方形透しをもち、脚部との境に蛇や亀、鳥などのミニチュアの動物がを並べられていることなど、本例とは異なる。また楠見遺跡例も筒状部を欠くものの、受け部の状況から筒状部との角度はかなりあったものと考えられる。脚部も明確な台形状にはならず、緩やかなカーブを描きその肩には粘土帯による装飾が施されている。

国外に目を転じみれば、韓国の伝慶州郡出土資料に古新羅時代の比較的類似した器台（盤形坩台）が発見されている[4]。写真（372ページ1314の土器）でしか確認できないが、筒状部から受け部にかけての形態がよく似ている。筒状部には３条の沈線（突帯？）状のものを巡らせて文様帯を意識しているようであるが文様や透し孔などは見られないようである。脚部は下方に丸く彎曲し、中央の突帯状の上下には方形の透し孔が穿たれている。筒状部との境には突帯状の文様は見られない。

以上のように、御倉遺跡出土例と比べると、ある部分は似ていても全体としてはそれほど類似しているとは言えないものばかりである。現在のところ、韓国の盤形坩台と呼ばれる器台が本例に最も近いと言える。

（三宅　弘）

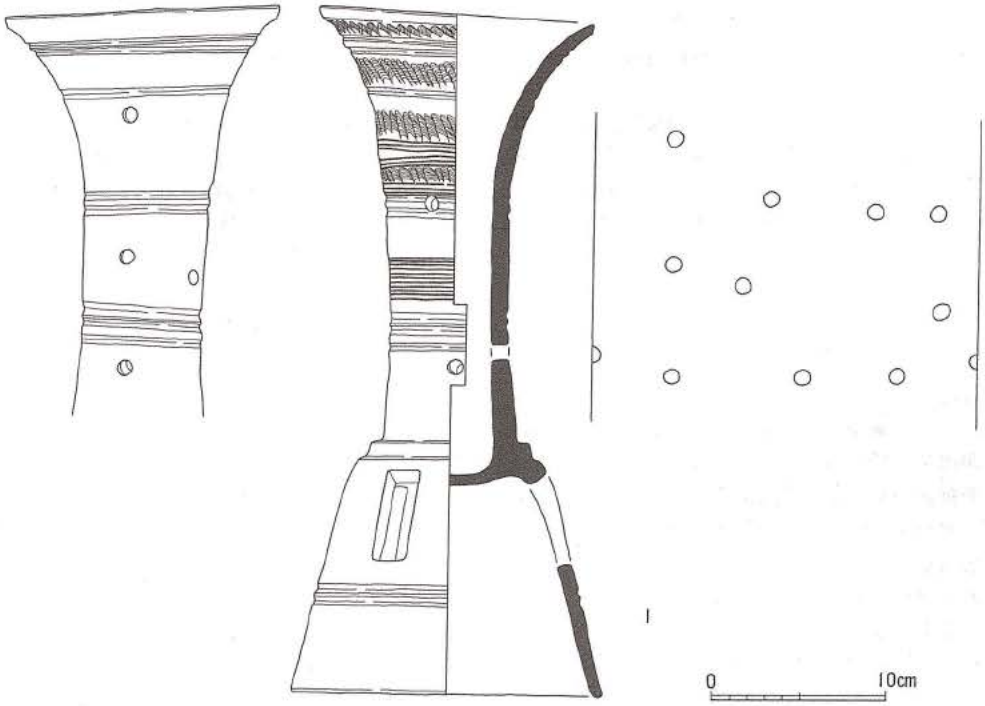
注

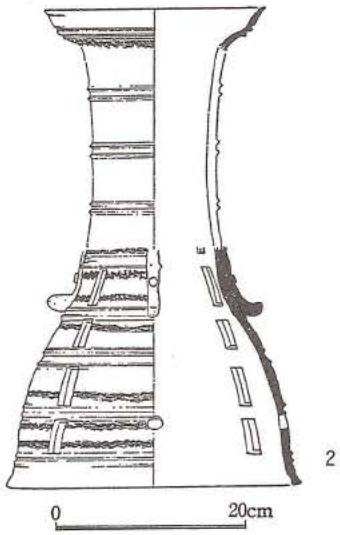
1．財団法人滋賀県文化財保護協会　神保忠宏氏からご教示を得た。

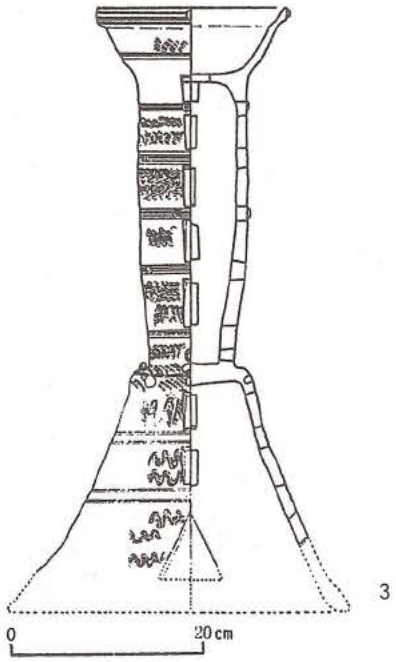
2．a 前原豊、伊藤良、宮内毅「大室古墳群」（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬県遺跡大事典』上毛新聞社、1999年）
　b 松本浩一「前二子古墳」（大塚初重、小林三郎、熊野正也編『日本古墳大辞典』東京堂出版、1989年）

3．藤井保夫「近畿地方(2)―紀伊地域―」Ⅱ【報告】須恵器の源流―各地の初期須恵器をめぐって―（楢崎彰一監修『日本陶磁の源流―須恵器出現の謎を探る―』、柏書房株式会社、1984年）

4．朝鮮総督府「朝鮮古跡図譜」3（『朝鮮古蹟図譜』朝鮮考古資料集成１、1916年）1981年出版科学総合研究所より復刻







1．御倉遺跡　2．楠見遺跡　3．前二子古墳

290.　大津市青江遺跡採集の製錬滓

1．はじめに

小稿は、大津市青江遺跡内で採集された製錬滓の紹介である。今回紹介する地点で製錬滓の散布を最初に確認されたのは、1974年に湖南地域の製鉄遺跡の分布調査成果を発表①されて以来、長年瀬田丘陵を中心に、滋賀県内の製鉄遺跡の分布調査を地道に続けておられる千歳則雄氏である。小稿では、千歳氏のご厚意により、製錬滓の紹介を行うとともに、その製錬滓から考えられる幾つかの状況について、若干の推論を行うこととしたい。

2．製錬滓採集地点の概要

青江遺跡は大津市神領二丁目に所在し、瀬田丘陵北斜面に位置する。近隣の三大寺付近には、奈良・平安時代に営まれた近江国庁跡が所在し、青江遺跡では近江国庁跡が機能していた時期と同時期の瓦類が出土していたことから、以前より相互の関係が注目されていた。平成11年度に近江国庁跡の中門から南に約400mに位置する場所で、大津市教育委員会による発掘調査が行われ、近江国庁跡の遺構と同時期に当たる奈良時代後半から平安時代初めの区画溝や建物跡が検出され、飛雲文をもつ軒先瓦や須恵器などが出土し、近江国庁跡との関連および青江遺跡の性格が俄然注目されるところとなってきている②。

今回紹介する製錬滓は、平成11年度に大津市教育委員会によって行われた調査地より南西約50mのところで採集されたものである。採集地点は、瀬田丘陵から続く南東から北西に舌状に延びる丘陵の尾根から、南西に下りてくる丘陵裾部に位置し、高橋川の右岸、奥村稲荷大明神前の高橋川に架かる橋（みすぎばし）を渡ったところにある四つの鳥居付近である。鳥居付近では、地表面が降雨時の水流による削平を受けており、主に削平を受けている部分で製錬滓の堆積を確認することができる。この製錬滓堆積状況の観察からは、これら製錬滓は水流によって上方から流れ込んだのではなく、製鉄操業時の堆積状況をそのまま残しているものと判断できる。このような状況から、製錬滓の堆積層は覆土によって厚く覆われている可能性が高く、現地表面観察のみからだけでは製鉄炉の位置を確定することは困難である。なお、現在高橋川に架かる橋（みすぎばし）は、昭和38年に竣工されたものであることが橋の標識の記述から判る。

3．採集製錬滓について

採集した製錬滓については、写真１で示した。全点ともに、色調は地の部分で黒褐色、上面の一部は急冷によるため、うぐいす色を呈している。上面は緩やかな流動状で、下面も微細な凹凸をもちながらも全体的には流動状で、幅２cm前後の緻密な流動滓が重複したものと推定される。破面の気孔は横に長くのび比較的大きいため、流動していたと考えられる。以上の諸特徴から、採集した製錬滓は、炉外に流れ出した滓である炉外流出滓であると判断される④。

図１　青江遺跡製錬滓採集地点と近江国庁跡（註③）

鳥居周辺で表面観察できた製錬滓についても、その大多数が写真１で示した資料とほぼ同様の諸特徴を兼ね備えている。このことから、鳥居周辺で表面観察される製錬滓は、その大多数が炉外流出滓であると言ってよい。

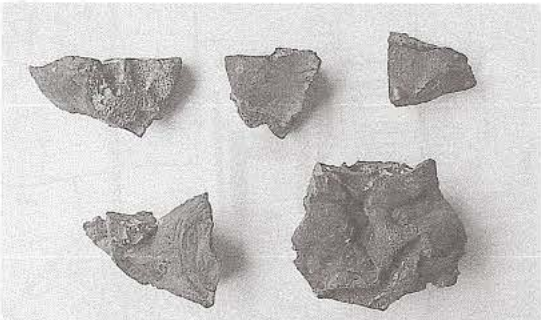


写真１　青江遺跡採集の製錬滓

４．製鉄炉の炉形について

日本列島の古代製鉄技術体系のあり方は、製鉄炉形によって、長方形箱形炉と半地下式竪形炉の２つに類型化することができる。[5]長方形箱形炉は平坦地に築かれることが多く、検出される平面形としては楕円形から長方形を呈し、炉高は１ｍ程と低炉で、炉壁の長辺両側、炉床より約20cm程上の低い位置に、複数の送風孔が穿たれ、そこから送風を行うことを特徴とする。一方、半地下式竪形炉は斜面に築かれることが多く、検出される平面形としては円形を呈し、炉高は1.5ｍ程と長方形箱形炉と比べ高炉で、炉の背後の高い位置から踏みフイゴによる強力な送風を行うことを特徴とする。

また、長方形箱形炉と半地下式竪形炉の差異として、出土製錬滓全体に占める炉外流出滓の出土量の割合が、長方形箱形炉では非常に多いが、半地下式竪形炉では０から一割以下と非常に少ないことを挙げることができる[6]。

青江遺跡の製鉄炉の炉形について遺構の面から検討を行うことは、現時点では不可能である。しかし、今回採集した製錬滓および表面観察により確認した製錬滓の大多数が、炉外流出滓であるという点を重視するならば、青江遺跡の製鉄炉の炉形は長方形箱形炉である可能性が高いと言える。

５．操業時期について

青江遺跡の製錬滓散布地より土器の採集は確認されていないので、厳密な意味での考古学的年代決定は現時点では不可能である。以下は類推となるが、製鉄遺跡周辺の状況を踏まえながら製鉄操業時期の検討を進めていきたい。

青江遺跡製錬滓散布地より北東約50ｍのところで、最近、奈良時代後半から平安時代初めの遺構・遺物が見つかり、それらが近江国府の主要施設である可能性が高いことは先に述べた。管見ではこのような国府の主要な施設の近隣で、製鉄炉が発見された事例を知らない。また、製鉄燃料の木炭供給の点からも、国府主要施設の近隣で製鉄操業を行うことは不自然であるという[7]。すると青江遺跡の製鉄操業は奈良時代後半以前か平安時代初め以降である可能性がでてくる。

なお、瀬田丘陵における操業時期の類推可能な製鉄遺跡を時期ごとに並べてみると、月輪南流遺跡（７世紀後半）、源内峠遺跡（７世紀後半）、観音堂遺跡（７世紀末）、木瓜原遺跡（８世紀前半）、野路小野山遺跡（８世紀中頃）と南西から北東に順次移動している様相がみてとれる[8]。また、須恵器生産についても、山ノ神遺跡、笠山遺跡、観音堂遺跡、木瓜原遺跡と製鉄遺跡と同様に南西から北東に順次移動している様相がみてとれることは示唆的である[9]。青江遺跡は月輪南流遺跡や源内峠遺跡より西に位置することから、７世紀後半以前、すなわち瀬田丘陵内で最も古い製鉄遺跡の候補として挙げることができるかもしれない。

６．おわりに

現状では、以上の所見は推論の域を超えるものではないが、今回紹介した製錬滓は、近江国府の成立、近江国府と周辺の生産遺跡との関係に関して、重要な問題を提起するものである点は確かである。今後、具体的な調査・研究が進められる中で、これらの問題が解決されるであろうことを期待して、結びとしておきたい。

（大道　和人）

註

①千歳則雄『逢坂山製鉄遺跡群研究資料－京都市東山区、滋賀県大津市・草津市』1974年

②田中久雄「近江国庁関連遺跡」『平成11年度第２回記念物担当職員等研修会』滋賀県教育委員会　2000年

③註②と滋賀県教育委員会『平成７年度滋賀県遺跡地図』1996年をもとに作成。

④穴澤義功「付論　本研究関係用語解説」『国立歴史民俗博物館研究報告』第59集　国立歴史民俗博物館　1995年

⑤穴澤義功「製鉄遺跡からみた鉄生産の展開」『季刊考古学』第８号　雄山閣　1984年

⑥穴澤義功「考古学的に見た日本の製鉄遺跡の歴史」『98国際金属歴史会議しまね　BUMAⅣ』国際金属歴史会議しまね実行委員会・日本金属学会　1998年

⑦現地での穴澤義功氏の意見。

⑧瀬田川左岸と右岸の製鉄遺跡では遺跡の性格が異なっていると判断されるため、右岸の遺跡は除いた。大道和人「鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論－滋賀県の事例を中心に－」『紀要』第９号　㈶滋賀県文化財保護協会　1996年

⑨畑中英二「滋賀県下における手工業生産－７世紀後半代の様相を中心に－」『北陸古代土器研究』第５号　北陸古代土器研究会　1995年